

森岡孝二『働きすぎの時代』岩波新書、2005年

“ 9時5時社員 ”と言われていたのはいつの時代のことか。当協議会が2003年～2004年に実施した「新しいライフスタイルを求めて」調査の結果からも、昨今の若者の労働時間が“ 9時5時 ”から“ 8時7時 ”となり、出勤が早まっている上に帰宅までもが遅くなっている、という実態が明らかにされている（詳しくは、本号の報告を参照のこと）。また、過労死やストレス疾患、サービス残業など...は引き続き大きな社会問題となっており、解決あるいは解消に向けた取り組みが進められている。とはいえ、未だ明るい兆しはみられない。

本書は、そのような“働きすぎ”の状況を生み出す経済社会や企業社会に警鐘を鳴らしている。本書の構成は、「序章 働きすぎの悲鳴が聞こえる」、「第一章 世界に広がる働きすぎ」、「第二章 家庭も出先も職場になった」、「第三章 消費が変える雇用と労働」、「第四章 労働の規制緩和と二極分化」、「第五章 労働基準とライフスタイル」、「終章 働きすぎにブレーキをかける」となっているが、とりわけ働きすぎの時代になってきた背景を資本主義の変化の4つの側面、「グローバル資本主義」、「情報資本主義」、「消費資本主義」、「フリーター資本主義」から考察を行っている。

やはり興味を引かれるのは、IT化、情報通信技術の発達との関係である。例えば、会社を出た後の帰り道、飲んでいる最中、帰宅後、休日...に携帯電話が鳴る、パソコンにメールが届く。画面をみるとその発信元は会社の上司、あるいはお得意先だった...このようなことは誰もが経験しているだろう。携帯電話やメールの存在は、仕事とプライベートの境界線をなくし、休息が感じられないような環境を生み出す。働きすぎの社会を構築するひとつの病巣といえよう。筆者は本書を通じて、「教養や娯楽やスポーツや社会活動の時間はもちろん、食事や睡眠や家庭生活の時間まで削って、すべての活動時間を仕事に費やすような働き方/働かせ方をするのは、より大きな罪悪であることを理解するだろう」とも述べている。情報通信技術の発達をはじめ、資本主義の変化と働きすぎの時代との結びつきが明瞭に描かれている。

さらに、終章では、筆者が働きすぎにブレーキをかけるための個人と組織の指針と対策を提起している。その中で、労働組合がすべき事柄として、時短キャンペーンの取り組み、年休の取得促進、30代正社員の働きすぎの解消、過重労働の防止、三六協定の締結と要員確保、カップル労働時間（夫婦の合計労働時間）増大のストップ、パートタイム労働者の組織化および均等処遇、IT対策といった8つの指針および対策が述べられている。労働組合ですでに取り組まれている、あるいは取り組もうと考えられている事柄もあるかもしれないが、現状認識をより一層深め、問題点を見極めた上で、実態に合った解決策を導き出すことが重要であろう。

上記のような実状は、“ニート”の問題も孕んでいる。一方で、若者よ、もっと働きなさい...と心の中で思っている年輩の方も少なくないと思われる。働きすぎという見方にもさまざまな角度があるが、現在の働き方、仕事のやり方に大きな問題があるという点は、世代に関係なく共通した認識なのではなからうか。(Y.O)